

2021. 7. 18. 主日礼拝説教  
聖書：ヨハネによる福音書 16章 16-24 節  
『その悲しみは喜びに変わる』

みなさんは自分の人生に何を期待しておられるでしょうか。人と会うときにどんな楽しいことが起こるかとか期待しておられるでしょうか。それともどんな悪いことが起こるかとか恐れておられるのでしょうか。どうせこれまでの人生にも大して目が覚めるほどの良いこともなかったから、これからの人生も似たようなものだろうとタカをくくったり、もう老い先短いから今更などと思ったりしてはいないでしょうか。

わたしたちは人生に喜びを期待しつつ、そうはうまくゆかないだろうという一種のあきらめに似た不安感も同時に抱いてしまいます。以前、長野県の飯田市の子どもたちが町の大通りにリンゴ並木を作ろうと街頭募金をして苗木を植えました。何年もかかって子どもたちは故郷の通りに名産のリンゴの白い花が咲き溢れる情景を夢見ながら苗木を植えたのです。しかし、子どもたちの頑張りを尻目に大人たちは「今に折られるぞ」「今に盗まれるぞ」と言うのです。実際その通りになってしまったのですが、大人たちは「だから言わないことではない」とうそぶいたそうです。わたしたちはこのように未来に対する漠然とした消極的というか否定的な気持ちを抱え込んでいるようです。そのような不安を持って生きるのと、必ず喜びが訪れると信じて生きるのとでは、長い人生の間におのずと失敗や難しさを抱え込む度合いに違いが生じてくるのではないのでしょうか。

今朝お読みいただきましたヨハネによる福音書 16章 16～24 節の中で主イエスは「その悲しみは喜びに変わる」(20 節)「あなたがたは心から喜ぶことになる。その喜びをあなたがたから奪い

去る者はいない」(22 節)と言われました。この言葉は、これからいよいよ十字架につけられて殺されるという、主イエスにとっても弟子たちにとっても悲劇的な出来事の始まるという時に語られた言葉です。他にも悲しみにまつわる言葉は枚挙に暇がありません。「悲しむ人々は幸いである。その人たちは慰めら

れる」(マタイ 5;4)と言われたのは有名な言葉ですし、パウロも「万事が益となるように共に働くということを、私たちは知っています」(ローマ 8;28)と言っています。

わたしたちはどんなに悲しく、苦しく、難しい状況にあっても、神がわたしたちを悲しませ、苦しませるためにこの状況の中に置かれていると思うべきではありません。喜びに入れられるために全ての時はあるのです。それ故にわたしたちは喜びを期待すべきです。

わたしたちの人生には、悲しみを通さないと喜びに入れられないものもあります。生まれ出る苦しみ、初めて母親から離れて社会に出る入園の時の悲しみ、親離れして社会に巣立つ苦しみ等々……。わたしたちの人生には節目のように悲しみがありました。しかし、すべて喜びに入るための悲しみだったのです。だから喜びを期待したくてもどうせ無駄に終わるという人生ではなく、つねに喜びを求め、喜びを確信し、喜びを待ち望んで生きるべきなのです。

十字架の死という悲しく絶望的な状況の中から復活して愛する弟子たちに喜びを与えられた主イエスが「その悲しみは喜びに変わる」と言われるのです。

その主がわたしたちと共にいてくださるのですから、わたしたちが人生の途上で味わう恐れや悲しみ、不安や失敗をどうして喜びに変えて下さらないことがあるでしょうか。主を信じて喜びある生き方を望みたくおぼえます。